

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

Asian Excavated Jew's Harps : A Checklist(1) : Lamellate Jew's Harps(1)

| | |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-05-27 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 直川, 礼緒, Tadagawa, Leo メールアドレス: 所属: |
| URL | https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1094 |

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



アジアの発掘口琴チェックリスト(1)：薄板状の口琴(1)

Asian Excavated Jew's Harps : A Checklist (1) - Lamellate Jew's Harps (1)

直川礼緒 TADAGAWA Leo

口琴は、ユーラシア大陸を中心に、世界中に分布する、始原的な楽器であるが、いつごろ、どこで、どのように生まれたのかは、明らかではない。本稿では、その起源を探る手がかりとして、アジア地域における口琴の考古学的な発掘例を、ほぼ年代の古い順に検証する。その第一部として、薄板状の口琴のうち、紐を引くことによって弁を振動させる、いわゆる「紐口琴」を採り上げる。

紀元前8～4世紀のものとする中国内蒙古自治区の夏家店上層文化出土の骨製の口琴をはじめ、北京市延慶区の軍都山墓地群、モンゴル国トゥヴ県のモリントルゴイ遺跡、ロシア連邦トゥヴァ共和国のアイムィルリグ XXXI 遺跡、同ハカス共和国のサハサル古墳、同ヤマロ-ネネツ自治管区のウスチ-ヴォイカル土壘から出土した遺物を検証する。

キーワード：口琴 Jew's harp、音楽考古学 Music archaeology、
古代楽器 Ancient musical instruments、北方アジア Northern Asia

本稿は、2006年7月30日、第5回国際口琴大会（オランダ、アムステルダム）での口頭発表「The Checklist of Asian Excavated Jew's Harps」(英文)と、それに改訂を加え、国際口琴協会の会報第4号に掲載された論文(Tadagawa 2007)とをもとに、以降蓄積されてきた新たな情報を加えて改訂した、日本語版である¹。本稿では、薄板状の口琴 lamellate Jew's harp のうち、紐を引くことによって弁を振動させる、いわゆる「紐口琴」を採り上げる。弾くタイプの薄板状の口琴と、湾曲状の口琴 bow-shaped Jew's harp² については、次稿で取り扱う対象とする。

口琴は、世界中に分布する、ユニークな楽器である。その発音システムの特殊性³から、世界各地で同時多発的に生まれたものではなく、ひとつ、もしくはごく限られたいくつかの発想が、次第に文化から文化へと伝わっていったものだと考えられる。アジアで生まれ、ヨーロッパに伝えられたと推定される。さらに、大航海時代以降には、ユーラシア大陸以外の地、すなわち、アフリカ、南北アメリカや、メラネシアを除く太平洋地域⁴にも、ヨーロッパ人の手によって、交易品としてもたらされた。近・現代における、世界の口琴文化の状況は、民族音楽学的な研究をはじめ、音響学的、言語学的、文献史学的などの様々な研究により、ここ30年ほどでかなり明らかになってきたと思われるが、その発祥の地はどこか、

いつ頃、どのように生まれたのかなどの詳細は全くといってよいほど不明である。

本稿では、現時点で筆者の手に情報がある範囲で、アジア地域で発掘された口琴を概観し、今後の研究の足掛かりとする。

ヨーロッパ地域では、非常に多くの口琴の発掘例が知られており、ノルウェーの研究者コルトヴェイトの著書 (Kolltveit 2006) では、デンマーク、フィンランド、アイスランド、ノルウェー、スウェーデン、アイルランド、イギリス、オランダ、ベルギー、ドイツ、オーストリア、スイス、リヒテンシュタイン、フランス、イタリア、ベラルーシ、エストニア、ハンガリー、ラトヴィア、リトアニア、モルドヴァ、ルーマニア、ロシア、スロヴァキアの、24 国から 830 例が対象として採り上げられている。一方アジア地域では、非常に情報が限られているが、何本かの口琴が発掘されており、口琴の起源と歴史を考える上で、重要な意味を持つと思われる。

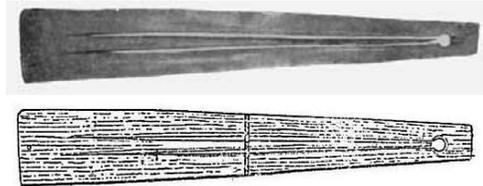


fig. 01 中国内蒙古自治区夏家店上層文化の口琴 [01] 写真 (上)

fig. 02 同実測図 (下)。中国科学院考古研究所内蒙古工作队 1974 より

1. 中国内蒙古自治区 Inner Mongolia, China [01]⁵

現時点で最古の口琴のひとつが、中国内蒙古自治区東南部に位置する、赤峰市⁶の夏家店上層文化の遺跡の、14 号墳墓から、1960 年に発掘されている (fig. 01, 02)⁷。夏家店上層文化は、紀元前 1,000 年～ 600 年頃まで続いた、青銅器文化であり、この遺跡の発掘品は、紀元前 8～4 世紀のものとされている (中国科学院考古研究所内蒙古工作队 1974)。

発掘チームによる報告書では、この遺物は口琴とは同定されておらず、「梭 (機織りに用いるシャトル)」とされている。これを口琴と同定したのは、ミシガン大学人類学博物館のハニチャーチ Honeychurch⁸ であると考えられ、その未発表の原稿「A Comprehensive Study of Bronze and Early Iron Age Burials from Mongolia, South Siberia, and China」⁹ 中に言及が見られる¹⁰。

ハニチャーチの指摘する通り、この物体が口琴であることは、疑いの余地がない¹¹。骨製の薄板状で、長方形に近い縦長の等脚台形¹²。全長 98mm¹³、横幅の記載は報告書にはないが、写真から、最大幅 (弁の付け根側) 約 16mm、最小幅 (弁の先端側) 約 6mm と推定される (実測図は、写真に比べてやや横幅が広く描かれているように感じられる)。

振動弁は、先端の尖った、縦長の二等辺三角形 (に近い形) に切り出されており、頂点部 (弁の先端部) と杵との間には、大きめの円形の穴が存在している。おそらく、この穴を最初に開け、そこから、弁の付け根部分に向かって、弁と杵との間の隙間を作り出し、弁を切り出して行ったものと思われる。この穴に、紐を輪にして結び、「引き紐」を引く力に対抗するための、持ち手とした可能性が高い (このような穴の例は、現行のアイヌ民族の竹口琴ムックリに顕著である (fig. 03))。



fig. 03 北海道アイヌ民族のムックリ
鈴木紀美代製作、筆者蔵

振動弁の付け根側の枠には、小さな穴が開けられていると記されているが、写真と実測図でははっきりとは確認できない。この穴に、「引き紐」を取り付け、それを引くことによって弁を起振させた、「紐口琴」であると考えられる。

口琴には、大きく分けて、薄板状のもの（以下、Aタイプとする）と、湾曲状（Bタイプ）の二種類がある¹⁴。このうち、薄板状の口琴は、竹、椰子の枝、木、金属（真鍮など）骨、牙、角など、様々な素材で作られ、弁の起振方法によって、いくつかのタイプに分けられる¹⁵ (fig. 04)。

A1 紐は付いておらず、振動弁の付け根側の、さらに延長上にある、枠の先端を指で弾くと、反動で弁が振動する。現行の例は、フィリピン、ボルネオ島、中国西南部、ラオス、タイ、ヴェトナム、カンボジアなどに見られる。東南アジアの中でも、比較的中心部に分布するタイプ。他のタイプに比べて、持ち手の部分が、長く、そして厚く作られている場合が多い。

A2 紐が、弁自体の根元付近に付けられており、紐を引くことにより、弁を起振させる。アイヌ民族のムックリ (fig. 03) が代表的なもの。アムール川流域のトゥングース（ツングース）系諸民族、チュコトカ半島のチュクチ、東シベリアのエヴェンキ、西シベリアのケト（ケット）、バシコルト（バシキール）、中国寧夏回族自治区、中央アジアのキルギス（クルグズ）、カザフ、トルクメンなど、北方アジアに広く薄く現行例が見られる。東南アジアには存在しない。

A3 紐が、振動弁の付け根側の、延長上にある枠の先端に結び付けられており（A3a）、あるいは、枠に開けられた穴に通されており（A3b）、紐を引くことにより、弁を起振させる。A3bの場合、引き紐に結び玉が作ってあって、抜けないようにしてあるもの（「一本どり」と、輪になっている場合（「二本どり」）がある。「一本どり」の場合は、現行の民族例では、結び玉のある側を口腔に当てる場合が圧倒的に多い。

このタイプの現行例は、台湾、インドネシア各地、ニューギニア島の西部から、中国南西部、ネパール、ナガランド、ラージャスターンに至る、東南アジアの周縁部と、その外側の隣接地域に見られる。また、サハリンのニヴフ、モンゴル、南シベリアのトゥヴァなど、北方アジアにも、ごく限られた地域にはあるが見られる。これら、北方のA3bタイプの口琴が、南方の同タイプのものとのような関係を持つのか、またA2とどのような関係にあるのか、現時点では明らかではない。

A4 紐が、振動弁の付け根側の、枠に開けられた穴に通されている。演奏時は、紐を、A2やA3とは逆方向に引くことにより、振動弁自体の根元付近が、紐を引く側の手の親指の、第一関節と第二関節の間の部分に「打たれに来る」。現行例は、ニューギニア島の東部全域のみに見られる。

A5 起振原理としてはA4とほぼ同じだが、紐は付いていない。親指の第一関節と第

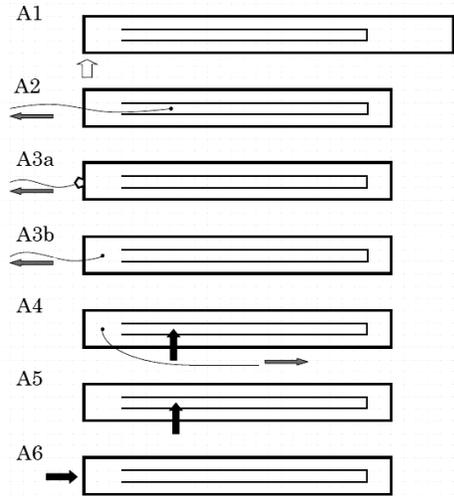


fig. 04 薄板状の口琴「Aタイプ」

二関節の間の部分で、振動弁自体の根元付近の一定のポイントを打つことにより、弁を振動させる。ニューギニア島中央部の、ごく限られた地域にのみ見られる¹⁶。

A6 紐は付いておらず、振動弁の付け根側の、さらに延長上にある、杵の先端の「重り」の部分で、楽器の長辺と平行方向に指で打つことによって弁を振動させる。ジャワ島西部スダ地方にのみ見られる。

A7 その他。例えば、弁の途中にとりつけた「つまみ」を指でつかんで離すものや、「二重バネ構造」(直川 1991) など、実験的なもの。

これらの分類のうち、夏家店上層文化の骨口琴は、A3b タイプの中でも、北方のタイプに属している。

2. 中国北京市延慶区¹⁷ Yanqing District, Beijing, China [02 ~ 05]

北京市の北西部、軍都山墓地群で 1985 年から 1991 年にかけて行われた発掘調査で、4 本の竹製口琴(原文:竹篾簧片)が出土している¹⁸ (fig. 05, 06)。この遺跡は、春秋時代(紀元前 770 ~ 403 年)とほぼ同時代のもので、夏家店上層文化とは時期的には重なるが、遺物の性格が異なることから、玉皇廟文化と名付けられた。山戎と呼ばれた北方遊牧民の墓地だと考えられる(北京市文物研究所編著 2007)。

4 本中最も古い [02] は、春秋時代早中期のもので、264 号墓の遺骨の左尺骨と腰の間に、青銅の短剣と削刀(削る作業に用いる小刀)に挟まれて出土。杵の形状は、弁の付け根側が広く、持ち手側(弁の先端側)が狭い、等脚台形で、全長 103mm、幅 10mm、弁の長さ 72mm、厚さ 0.5mm。直径 1mm の穴が弁の付け根側の杵に開いており、杵の一部は欠損している。弁の先端部の隙間は、比較的大きい。銅の錆が浸透して、全体に藍緑色との記載がある。

95 号墓から出土したのは、春秋中期のもの [03] で、左右の大腿骨の間に見つかった (fig. 07)。全長 98mm、幅 10mm、弁の長さ 70mm、厚さ 0.5mm。直径 0.8mm の穴が弁の付け根側の杵に開いており、杵の、持ち手と、それに近い部分が欠損。おそらく弁の先端も欠けて失われている。弁の付け根側の辺が、丸く整形されている。

唯一の完品が、102 号墓から出土したもの [04] で、[03] と同時期と考えられる。全長 91mm、幅 10mm、弁の長さ 66mm、厚さ 0.5mm。直径 0.5mm の穴が弁の付け根側の杵に開いており、杵の形状は、持ち手部分が一段階細くなる、凸型。右骨盤の内側から見つかった。

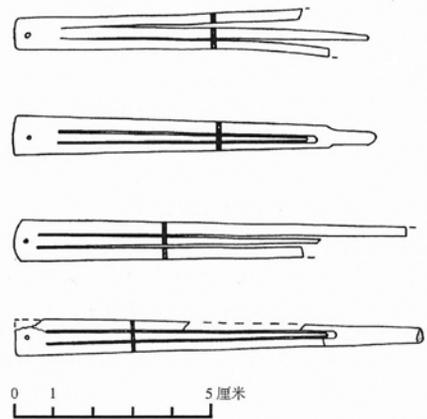


fig. 05 中国北京市延慶区軍都山墓地群出土の口琴の実測図。下から [02][03][04][05]。北京市文物研究所 編著 2007 より

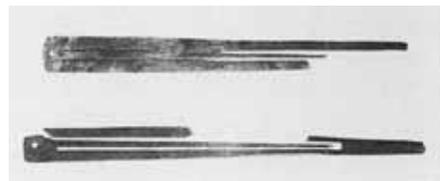


fig. 06 中国北京市延慶区軍都山墓地群出土の口琴の写真。下から [02][03]。北京市文物研究所 編著 2007 より

一番時代が新しい156号墓からの出土品[05]は、春秋晩期前段のもので、全長89mm、幅9mm、弁の長さ78mm、厚さ0.5mm。直径1mmの穴が弁の付け根側の杵に開いている。弁は完全に残っているが、杵は途中から外に開いており、さらにその先で折れて失われている。右尺骨の下、腰との間、削刀の上にあった。

報告書では、すべて男性、おそらく中流階級の兵士の持ち物であったとしている。全て、[01]と同じくA3bタイプの口琴だと考えられる。

この4点で疑問なのは、その素材と弁の形状である。現行の竹製（および椰子の枝製）の口琴の場合、弁の切り出しは通常、繊維の方向に沿って行われるか、あるいは直角に繊維を切るかの二方向に限られる（この結果、先の細い振動弁は、二等辺三角形にはならず、途中に「肩」のある細長い凸型になる）¹⁹。現行のムックリに見られるような、繊維を無視した曲線や、斜めの直線は、電動糸鋸などの製作工具の発達と、観光土産としての「大量」生産のための作業効率向上の必要性に大きく関係している²⁰。この点、竹製であるにも関わらず、4本とも同じ様に弁を先細りにしてある軍都山の口琴は、その理由と製作方法が謎である。もしかしたら、竹製ではなく骨製なのではないか。その手掛かりが、報告書の図二〇七（p.463）のキャプションに、102号墓から出土した[04]を「骨簧片」としてある点かもしれない。他は全て（図二〇七に関わる本文中でさえ）美事に「竹」で統一されているのに、ここだけ見逃した誤植なのか。あるいは、ここのみが事実なのか。発掘品の実見・確認が必要である。また、当地に竹は自生していたのか、あるいは他（南方?）からの輸入なのか。当時の竹素材の流通経路も視野に入れた検証が望まれる²¹。

合計594基の墓から出土した、6万点におよぶ遺物の中に、見つかった口琴が4点のみとは、それほどポピュラーな楽器ではなかったという証拠だろうか。あるいは、たくさんあったのだが、植物質のため、ほとんど失われたのだろうか。

3. モンゴル Mongolia [06]

モンゴル国中央部、トゥヴ県のモリントルゴイ Morin Tolgoi 遺跡の匈奴の墳墓から、紀元前3～1世紀の骨製の口琴（fig.08）が発掘されている（ツェヴェーンドルジ Цэвээндорж 1990）²²。モリントルゴイ遺跡は、青銅器時代の鹿石を伴う遺跡で、口琴は、第1墳墓の遺骨の、左腰の部分から出土した（fig.09）。全長125mm、幅14mm、厚さ2mm。杵は、基本的にほぼ長方形であるが、弁の先端付近の、丁度口に当たる部分の幅を、弧を描くように狭く削り、「鳶の尾」状に形作られている。また、弁の根元側の杵の先端が「{ }」の

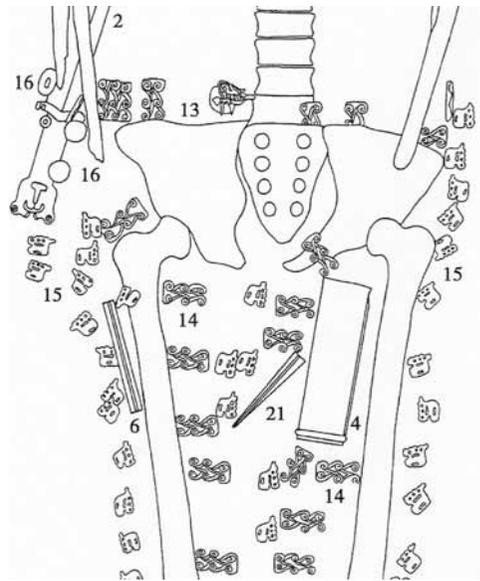


fig.07 口琴が発見された位置。95号墓遺物分布拡大図。図中の21番が口琴[03]。北京市文物研究所 編著 2007より

ような形にしてあり、演奏性能の向上と同時に、製作者のデザイン上のこだわりが感じられる。

振動弁は、長方形と二等辺三角形の複合的な形。長辺方向には、緩やかな放射状で、先端部でやや鋭角になる。あえて言うなら、縦長の五角形か。[01, 02, 04]とは異なり、弁の先端部に大きな穴はない。とは言え、わずかな隙間があるので、この部分に、紐を取り付けて、引き紐を引く力に対抗するための、持ち手とした可能性がないとは言えないが、弁の先端部から枠の縁までの長さが10mm以上あることから、持ち手の紐は存在しなかった可能性が高い²³。

振動弁の付け根側の枠には、引き紐を通すための、比較的大きな穴が確認できる。[01～05]と同様、A3bタイプである。これまで、北方のA3bタイプに関しては、現行の民族資料が他のタイプに比べて非常に少なく、それほど注目を集めて来たとは言いが、こうして見ると、口琴の歴史上、重要な意味を持つものであることがわかる。

枠と弁の一部が、折れており、また、弁の先端部側の枠の中央にも、ヒビが見られるが、部品の欠損はない模様である。

モンゴルでは、現代でも同タイプの竹や真鍮の口琴が使われており (Bellenger 1986、梶浦 1993)、また、発掘された口琴のレプリカも、ツァーガンという女性口琴奏者によって作られた模様 (西村 2002?)。現在では土産品としての骨口琴ヤサン ホール yasan khuur も見かける。



fig. 08 モンゴル、モリントルゴイ遺跡出土の口琴 [06]。写真提供：モンゴル科学アカデミー考古学研究所トウルバト、ツァーガン Turbat, Tsagaan 助教授

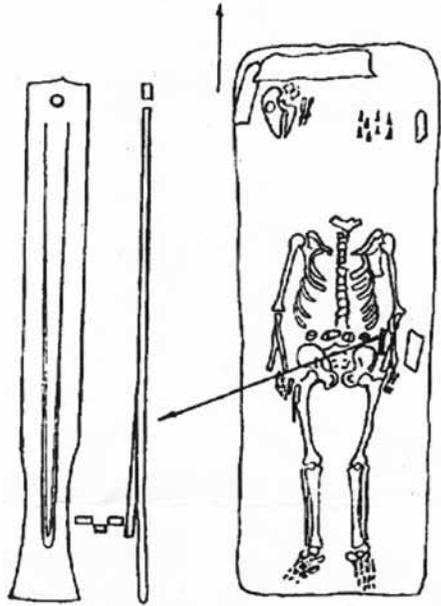


fig. 09 同上、[06] 実測図。ツェヴェーンドルジ 1990 より

4. ロシア連邦トゥヴァ共和国 Tyva Republic, Russia [07]

南シベリア、モンゴルのすぐ北隣に位置する、トゥヴァ共和国の中西部、チャー - ホル地区の匈奴の古墳 Аймырлыг XXXI の第 63 墳墓から 1980 年に発掘された、紀元後 2 世紀の骨製の薄板状の口琴 (A3b タイプ) が、サンクト - ペテルブルグのエルミタージュ美術館に収蔵されている。同館の特別展のカタログ (フェドセイエンコ Федосеев 編 2012)²⁴ によれば、骨製で、長さ 103mm。幅の採寸の記載はないが、鮮やかなカラー写真が掲載されており、最大幅約 15mm と推定される (fig. 10)。

枠は、全体的に線対称の縦長の五角形で、二つの長辺上には、左右対称の複雑な装飾が刻まれている。弁は、縦長の二等辺三角形に近い形。弁の付け根側に一つ、および先端側 (持ち手側) の枠上に一つ、ほぼ同じ大きさの、紐を通すための穴が開けられている。

トゥヴァでも現在、同タイプの竹の口琴クルズン - ホムス kuluzun-khomus が使われており (Süzükei & Tadagawa 2013)、また、共和国の首都クイズイル市にある 60 勇士記念国立博物館には、比較的新しい (発掘品ではない) と思われる骨口琴ソヨーク - ホムス söök-khomus や、真鍮製の口琴も展示されている。[07] は、これらの現行口琴の直接の祖先と考えても間違いなさそうである。



fig. 10 ロシア連邦トゥヴァ共和国、アイムイルルイグ XXXI 古墳出土の口琴 [07] 写真。フェドセイエンコ編 2012 より

5. ロシア連邦ハカス共和国 Republic of Khakassia [08, 09]

同じく南シベリア、トゥヴァ共和国の北隣の、ハカス共和国アスキズ地方の、タシトイク (タシュティク) Таштык 文化のサハサル (サフサル) Сахар 古墳から、骨製の薄板状の A3b タイプの口琴二本が出土している²⁵。どちらも、紀元後 4 ~ 5 世紀のものと考えられる。この地域には、匈奴、烏孫などが住んでいたとされ、また、タシトイク文化は、エニセイ キルギスの祖先とも関連付けられている。

口琴を発掘した、サンクト - ペテルブルグのロシア科学アカデミー - ピョートル大帝記念人類学・民族学博物館 (通称クンストカーメラ) の考古学者イーゴリ グラチョーフ Грачев, Игорь 氏 (fig. 11) によれば、21 号墳墓から 2011 年に発掘された一本 [08] (fig. 12) は、遺骨の右のふくらはぎのところ、ブーツの中に発見されたという。

筆者の実測によれば、全長は約 95mm、最大幅は約 12mm。形状は、ほぼ長方形だが、二本の長辺は、わずかに外側に円弧状に膨らんでいる。装飾などのない、シンプルな形。厚さは約 1mm で、全体にやや反っている。振動弁の形状は、ほぼ長方形だが、基部で横幅約 5mm に対し、先端部は約 4mm と、わずかに狭くなっており、正確を期して言うなら縦長の等脚台形。

引き紐を通すための穴が、振動弁の根元側、枠の端から約 7mm のところに開けられている。「持ち手」の紐を通すための穴も、振動弁の先端側、枠の端から約 5mm のところに、ほぼ同じ大きさのものが開けられている。

ブーツの中から発見された、という事実は、移動を常とする騎馬民族にとって、ブーツが大事なものをしまっておく入れ物であったことを示しており、次稿で採り上げるアルタイで発掘された B タイプの金属口琴の木製のケースや、同じく B タイプの現行のトゥヴァの鉄口琴のケースの多く (木製、石製) が、ブーツの形にデザインされている (Süzükei & Tadagawa 2013) この起源とも考えられ、興味深い。

これに先立ち、2009 年の発掘では、5 号墳墓から、破損した口琴が出土している [09] (fig. 13)。21 号墳墓とは 10 メートルほど離れた墓で、女性、あるいは子供と思われる遺骨の左側の腰部から発掘されたという。

数か所折れており、また枠の一部は失われているため、正確な寸法は測定困難であるが、全長約 90mm、最大



fig. 11 イーゴリ グラチョーフ 2015.12 筆者撮影

幅は約 12mm。形状は、ほぼ長方形。厚さは約 1mm で、全体にやや反っている。振動弁の形状は、長方形に近い縦長の等脚台形で、基部で横幅約 5mm に対し、先端部は約 3mm と、[08] よりもわずかに狭まり方の度合いが大きくなっている。

引き紐を通すための穴は、振動弁の根元側、杵の端から約 3mm のところに開けられている。「持ち手」の紐を通すためと思われる穴も、振動弁の先端側の杵の端から 5mm 程度のところにあけられているが、[08] とは異なり、楽器の横幅の中央ではなく、長辺寄りの場所、すなわち長辺側の端から 2mm 程度のところに開けられている。失われた部分にも、弁を中心として線対称の位置に穴が開けられていた可能性もある。この、欠損が、「持ち手」の穴とは無関係に、別の部分で起こっているのも注意を要する点である。

また、北京の [02] やモンゴルの [06] と同じく、遺骨の左腰部から出土していることも非常に興味深い。

この遺跡では、2016 年にも発掘調査を継続し、その後、報告書を出版予定とのことである。詳細な情報の公開が待たれる。なお、現代のハカスでは、B タイプの鉄製の口琴は、それほど隆盛ではないが使用されている。それに対して、発掘品と同じ A3b タイプ（を含む A タイプ）の口琴は全く使われていない。

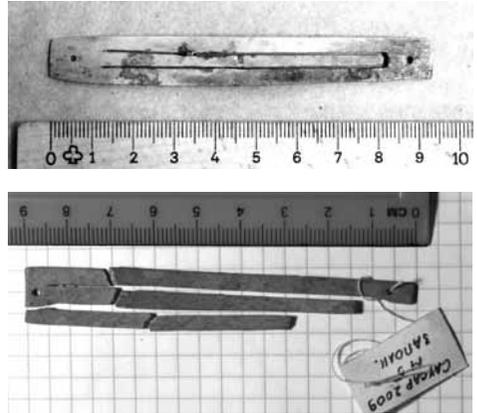


fig. 12 ロシア連邦ハカス共和国、サハサル古墳出土の口琴 [08] 写真 (上)。

fig. 13 同 [09] (下)。2015.12 筆者撮影

6. ロシア連邦ヤマロ-ネネツ自治管区 Yamalo-Nenets Autonomous Okrug, Russia [10, 11]

シベリアの西北部にある、チュメニ州に属する自治管区で、すぐ西には、ヨーロッパとの境、ウラル山脈がある。自治管区西南部シュルィシカル地区の中心地であるムジという村のシュルィシカル地区郷土誌博物館に、ウスチ-ヴォイカル Усть-Войкар 土塁（ヴォイカル川居留地とも）で発掘された、骨製の口琴 [10] が所蔵されている²⁶。

写真 (fig. 14) に基づく筆者の計測では、全長約 130mm、最大幅約 20mm。全体の形状は、アイヌ民族の竹口琴ムックリとよく似た、弁の付け根側で幅広く、全長の中央あたりから曲線を描いて、弁の先端側の幅の狭い端に至る、一升瓶等の「ボトルのシルエット」に近いような形をしている。ただし、左右対称ではなく、歪んでいる。

引き紐の穴は、振動弁自体に開けられており、これまで見てきた A3b タイプとは異なる、典型的な A2 タイプの口琴である。持ち手の紐を通す穴は、弁の先端側の杵上にある。振動弁の形は、直角の「肩」のある、縦長の「凸」形。大量生産に入る時代以前のムックリや、現行の多くの A1、A2、A3 タイプの弁に見られる、特徴的な形である。

ウスチ-ヴォイカル土塁は、オビ川下流域、北部ツンドラと森林との境にある 14～19 世紀の遺跡で、住民は、トナカイ狩猟と漁労に従事した、北部ハントィ（ハンティ）民族とされる (Федорова 2004)。中世の当該地域を知る上で重要な遺跡で、その存在は、19

世紀から知られていたが、本格的な発掘調査は、1993年が初めて。その後、2003～2008、2012、2013年と、数度に渡って発掘されている。この口琴が撮影されたのは2000年のこと²⁷なので、発掘は1993年（あるいはそれ以降2000年までの間）のものと考えられる。

口琴自体は、何世紀のものか不明だが、下記[11]と同時期、あるいはより新しい地層であるとするれば、18～19世紀以降か。いずれにせよ、これまで例を見てきた[01～09]とは異なり、かなり新しい時代のものである。ただし、現行のハントイの口琴は、引き紐の位置が異なるA3bタイプのものであり（fig. 15）²⁸、A2タイプが現存するのことは不明²⁹。両タイプの関係について、注意深く考察することが必要だろう。

現行例としては、北アジアから西アジア、中央アジアまで広範囲に分布するA2タイプだが、発掘例としては、現時点ではほかに情報がない。アイヌ民族のムックリの起源を知る上でも、重要な遺物である。

この他、同遺跡からは、「数多くの」骨製の口琴[11]が出土していることが、[10]の発掘の当時者でもある、フョードロヴァ Федорова, Н. によって報告されている（Федорова 2005）。ただし、どのようなタイプのものが何本発掘されているのか、現時点では不明（このため、本稿では[11]とするに留めた）。写真や実測図の存在も未確認である。

「2003～2004年の調査（18～19世紀の層）では多数出土した骨口琴が、2005年の調査（17世紀以前の層）では全く発掘されなかった。口琴の使用は、18～19世紀のものであると考えられる」（邦訳筆者）という（内容的にも注目すべき）文脈で現れるので、[10]とは別の楽器群である可能性が高い。今後の課題として、関係者に連絡をとり、より詳しい情報を収集したい。

前編のおわりに

口琴は、杵と振動弁から成る、単純な構造の楽器であるが、「笛かも知れない」「琴かも知れない」「太鼓としても使える」といった、曖昧さの紛れ込む余地の非常に少ない、音楽考古学上、貴重な遺物である。にも係わらず、一般的に考古学界においては、あまりにも知名度が低い。音楽界においてさえ、楽器としての重要性が十分に認識されているとは言いがたい。このような状況を早急に脱却し、世界中の発掘口琴の例をまとめ、比較・考察することが急務である。特に、東南アジア、南アジア、中央アジア、西アジアなど、現在も口琴の盛んな地域からの発掘例が、現時点で全く見当たらないのも（素材の問題もあるとはいえ）不可思議である。読者諸氏にも是非、情報収集にご協力いただきたい。

次稿では、ウラル山脈の西、地理的にはヨーロッパの東端に位置する、ロシア連邦バシ

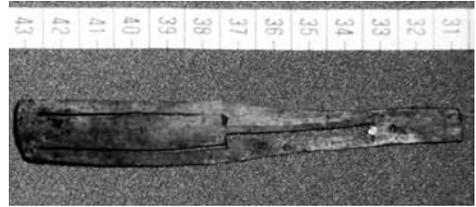


fig. 14 ロシア連邦ヤマロ - ネネツ自治管区、ウスチ - ヴォイカル土壘出土の口琴 [10]。
写真提供：ロシア科学アカデミーシベリア支部
ガリーナ ソルダートヴァ



fig. 15 現行のハントイ民族のトゥムラン tumran。
ロシア連邦ハントイ - マンシ自治管区スルグート
にて岡田一男氏入手。筆者蔵

コルトスタン共和国およびカマ川流域の、非常にユニークな A1 タイプの薄板状の口琴群の検証から始める。さらにロシア連邦アルタイ共和国、ケメロヴォ州、サハ共和国、そして日本（大宮 2 本と羽生 1 本の計 3 本）の B タイプの金属口琴を採り上げる。

中でも日本の口琴は、同タイプの中では、世界で最も古い（平安時代、10 世紀前半）もののひとつ（三つ）であり、口琴の歴史上重要な遺物である。特に、埼玉県羽生市の屋敷裏遺跡出土の口琴は、2015 年に情報が公開されたもので、同年度中に報告書が出版される予定であり、その詳細が待ち望まれる。

註：

- 1 2006、2007 年版で採り上げた対象は、本稿の [01]（内蒙古）、[06]（モンゴル）、次稿で取り扱う予定のバシコルトスタン共和国（1 本）、アルタイ共和国（1 本）、サハ共和国（3 本）、ブリヤート共和国（1 本）、日本（2 本）。それ以外は、新しい情報である。
- 2 直訳すれば「弓型」の口琴だが、日本語の「弓」では、曲がり具合があまり大きくない、円弧状ものがイメージされがちである。Bow の原義は、「曲げられたもの」であり、本稿では、「湾曲状・湾曲型」とした。他の訳語としては、「馬蹄形」などもあるが、特定の形が強くイメージされ、「半円形」「三角形」などの、別の形を排除するおそれがあり、適切であるとは思えない。より相応しい語の提案が待たれる。
- 3 口琴は、ザックス＝ホルンボステル分類による「摘奏体鳴楽器」ではない。音源は弁自体ではなく、弁と枠との隙間。言うならば「摘奏気鳴楽器」である、と筆者は考える。
- 4 メラネシア（パプアニューギニアなど）には、伝統的な口琴が存在していた。一方、それ以外の太平洋地域（ポリネシア、ミクロネシア）には、口腔を共鳴器とする弦鳴楽器や体鳴楽器（例えば、ハワイのウケケ 'ūkeke やニアウ カニ nī'au kani、マオリのローリア rooria など）は存在していたが、「摘奏気鳴楽器」としての口琴そのものはなかった。
- 5 本稿では、対象とするそれぞれの口琴に、便宜上の番号を付す。
- 6 発掘当時は遼寧省ジョーオダアイマク（昭烏達盟）。
- 7 鮮明な図版の入手に当たっては、埼玉県埋蔵文化財調査事業団の福田聖氏に 2015 年にご尽力いただいた。
- 8 2003 年当時。現在は、イェール大学（アメリカ合衆国コネチカット州ニューヘヴン）助教授。
- 9 執筆時期不明。2003 年、口琴研究の第一人者フレデリック クレイン Crane, Frederick (1927～2011) の提供により、資料入手。
- 10 ほぼ同内容の考察は、ハニチャーチ Honeychurch 2014 にもみられる。この文献では、「2.1 Novelty from Afar: The Jew's Harp」として、3 ページ強に渡って、口琴、特に [01, 06] に関する論考が行われている。
- 11 この発掘品が、現代中国の考古学界で、どのように解釈されているのか、口琴と正しく認識されているのかどうか、いずれ確認したい。
- 12 本稿では、形状を文字で描写する場合には、長辺方向と平行の中央軸を縦に置き、左右対称の状態を基準としている。
一方、写真や実測図は、できる限り、「通常の演奏状態を、観察者側から見た」状態

に統一した。つまり、右利きの奏者では、A タイプの口琴では弁の先端が向かって右側に位置し、弁の付け根側は向かって左に位置する（B タイプでは反対に、弁の先端は向かって左側に位置する）。原本でこのような状態に配置されていない画像は、回転させた。このため、元の写真とは光の当たり方が異なり、不自然に見えるものもあることをお断りしておく。

- 13 各報告書では、寸法は cm で表記されている場合が多いが、本稿では、mm で統一した。また、筆者が実測したり（出版された報告書に寸法の記載無し）、あるいは報告書等の写真や、実測図から割り出した寸法（例えば、長辺の長さは記載されているが、短辺の採寸の記載がない場合）は、「約 x mm」とした。

- 14 他に、idioglot / heteroglot（杵と弁の素材が同一、すなわち杵から弁が切り出されているか、あるいは杵と弁の素材が異なる、すなわち弁が杵に後から取り付けられているか）というザックスの分類（Sachs 1917）があるが、竹杵に真鍮弁が取り付けられた、台湾の山地民族の口琴のように、構造上は heteroglot でありながら、発音の原理的には明らかに idioglot と同じである例の扱いが明確ではなく、決定的な分類法とは言えない。

この他には、竹製／金属製という、素材による分け方もある。簡便で、分かりやすいので、筆者も場合によっては使うが、ヴェトナムのモン族のンチャンなどのように、構造的にも発音原理的にも「竹製」と全く同じでありながら、素材的には金属（真鍮、ベリリウムブロンズ等）製のものも存在しており、素材による分類も、本質的なものとは言えない。

この二タイプの、より本質的な違いは、演奏時に、杵を歯に当てるか、当てない（で唇に軽く触れる程度にする）か、という点である。A タイプ：歯に当てない状態で、弁が正しく振動する（当てると、正しい振動が得られなくなる）もの（＝薄板状）と、Bタイプ：歯（あるいは、それに代わる、質量を持った物体、具体的には、斧・金槌など）に当てないと、正しい振動が得られないもの（＝湾曲状）である。ただし、この分類は、説明が厄介で解りにくいという難点がある。また、両者の中間的な楽器の実例も（実験的なものではあるが）あり、熟考を要する。

- 15 口琴の分類については、直川 1990、1994 なども参照していただきたい。ただし、文献によって、分類の方法や、順番が異なっている。

- 16 A4 および A5 タイプのものは、竹筒を素材として、円筒をそのまま使用するものもあるため、「薄板状」という分類呼称が相応しいかどうか、検討の余地がある。

- 17 発掘当時は延慶県。

- 18 この情報は、ハニチャーチ Honeychurch 2014 中に見られる（p. 20）、「河北省北部中央の軍都山」で発掘された口琴について、その出典を探るうりに行き当たった。同書では、報告書の出版年も 2009 年とするなど、ズレが見られるが、報告書名「Jundu Shan Mu Di : Yu Huang Miao」と編著者「Beijing Municipal Institute of Cultural Heritage」は、「軍都山墓地：玉皇廟」（北京市文物研究所編著 2007）と同一であると考えられる。北京市延慶県と河北省、どちらも、広い意味では「黄河の北岸」を意味する「河北」の地である。

- 19 例外が、ニューギニア島の口琴。A3～A5 とタイプや大きさは様々だが、製作技法

は共通している。まず、竹の筒（あるいは半円筒～薄板に近い形状の筒の一部）を弁と両杵に、繊維に沿って三つに分ける。杵側は、ほぼそのままの状態でもエッジを鋭く削り出し、弁側は、先端に行くほど幅が狭くなるような「細長い二等辺三角形状に」削る。この結果、杵の先端は開いた状態になり、演奏時に閉じて（あるいは閉じた状態に糸などで固定して）隙間を狭くする。それほど発達していない工具で、精密な隙間を作り出す、優れたアイデアである。

なお、ナガランドや、ネパール東部などにも、同様に杵の持ち手部分が「割れて」いる口琴があるが、こちらは、振動弁の形は、長方形あるいは凸形であり、筆者の知る限り、弁を二等辺三角形に成形することはない。

- 20 古いムックリ（釧路市立博物館蔵など）の振動弁は、途中に「肩」のある細長い凸型。
- 21 他の竹の遺物は、用途不明の籤（細長い棒）35枚、小さな板や薄片が計3件と、ごく限られている。
- 22 この口琴については、1990年7月18日の読売新聞夕刊で、簡単な報告が掲載されている（伊藤哲朗 1990）。記事では、素材は鹿角とされ、ムックリに似た楽器であること、その写真を、モンゴル歴史研究所考古科主任の「ツェヴェンドルジ」が鶴丸俊明札幌学院大助教授（現学長）に見せたこと以外、詳細は全く分からなかった。2002年にはノヴォシビルスクの考古学者、クバリョーフ Кубарев 氏（次稿参照）にツェヴェンドルジ Tseveendorj 氏の連絡先を教えていただいた。またほぼ同時期に、この口琴を採り上げたハニチャーチの上記未発表原稿の存在を、クレインを通じて知り、そこに挙げられた参考文献から、ツェヴェンドルジの1990年の論文の存在も判明。その原文を、2012～13年、ウランバートルの図書館や研究機関で、ホームー歌手・モンゴル音楽演奏家の梅木秀徳氏に、その全面的なご協力のもと探していただく過程で、本稿掲載の写真の存在も明らかになるなど、全貌を知るまでに、多くの方々のお助けと、時間を要した。
- 23 持ち手の紐が存在しない A3 タイプの現行の口琴の実例は、例えば、インドネシア、パプア州のダニ族のビギギ、ネパール東部のライ族のアンゴムなどに見られる。アジア中央部トゥヴァのクルズン - ホムスのように、紐がなくても、保持を容易にするため、杵自体に「取っ掛かり」を削り出してあるものもある（Süzükei & Tadagawa 2013）。
- 24 情報提供は、2015年12月、クンストカメラの考古学者グラチョーフ ([08, 09] 参照) および同館コレクション管理担当キセルィ Кисель, В. の両氏による。カタログの入手に当たっても、両氏にご尽力いただいた。
- 25 ロシア連邦ハカス共和国の首都アバカン市にある、ハカス国立博物館の考古学者タンスタンディノフ Таштандинов И. 氏の情報提供(2014年10月)に基づく。2015年12月、発掘を担当した、グラチョーフ氏に面会、聞き取りと、発掘品の実見を行った。
- 26 情報提供は、2002年、ノヴォシビルスクの民族音楽学者、ロシア科学アカデミーシベリア支部のガリーナ ソルダートヴァ Солдатова Г. 女史による。ハントィ、マンシ等、西シベリアの先住民族の音楽の専門家である同氏が、2000年の現地調査の際に撮影。同地の発掘に関するより詳しい情報は、2015年に同氏より教示を受けた。
- 27 注 26 参照。
- 28 他に、ニエミ Niemi 2001 の CD の解説でも、トゥムランの写真はすべて A3b タイプ。

- 29 アレクセーエンコ **Алексеенко** 1988 中に、クンストカーメラ所蔵の「ハントィの」A2タイプの骨の口琴の写真が掲載されている。しかしながら、2015年12月、同書記載の収集番号 no. 5111-127 をもとに、同館の収蔵品を現地で確認したところ、ケト(ケット)民族のものであることが判明した。

参考文献：

Алексеенко, Е.

- 1988 Музыкальные инструменты народов севера Западной Сибири. Материальная и духовная культура народов Сибири. Академия наук СССР. p. 5-23.

Bellenger, Xavier.

- 1986 Musique et chants de tradition populaire Mongolie (CD 解説). Grem.
中国科学院考古研究所内蒙古工作队 .

- 1974 赤峰药王廟、夏家店遺址試掘報告 . 考古学報 . 第一期 . p. 111-144.

Crane, Frederick.

- 1968 The Jew's Harp as Aerophone. The Galpin Society Journal. no. 21. p. 66-69.

Федорова, Наталия.

- 2004 Городище Усть-Войкарское (Войкарский городок). Проблемы межэтнического действия в Сибири. Вып. 2. p. 34-50.

- 2005 12.08.2005 13:00:11 Игорь Бойцов: Ямальская археологическая экспедиция
と題された記事。http://www.archeologia.ru/Rss/2005-08 (参照 2016-01-06).

Федосеенко 編 .

- 2012 Кочевники Евразии на пути к империи. Государственный Эрмитаж.

Fox, Leonard.

- 1988 The Jew's Harp. A Comprehensive Anthology. Bucknell University Press.

Грачев, Игорь.

- 2010 Предварительные итоги археологического исследования могильника Сахар. Радловский сборник: научные исследования и музейные проекты МАЭ РАН в 2009 г. p. 209-211.

Honeychurch, William.

- A Comprehensive Study of Bronze and Early Iron Age Burials from Mongolia, South Siberia, and China. (未発表原稿)

- 2014 Inner Asia and the Spatial Politics of Empire: Archaeology, Mobility, and Culture Contact. Springer.

伊藤, 哲朗 .

- 1990 草原と風と チンギス・ハーンをたずねて《2》 口琴の音色 民族を超えて .
読売新聞夕刊 . no. 40994.

梶浦, 靖子 .

- 1993 モンゴルの口琴 . 口琴ジャーナル . no. 7. p. 26-28.

Kolltveit, Gjermund.

- 2006 Jew's Harps in European Archaeology. Archaeopress, Publishers of British

Archaeological Reports.

Lecomte, Henri.

2011? Khanty Mansi – Chants de l'ours, harpes & lyres des rives de l'Ob (CD 解説).
Buda Musique.

Niemi, Jarkko.

2001 The Great Awakening – Music of the Eastern Khanty (CD 解説). Global Music Centre.
西村, 幹也.

2002? モンゴルの口琴使い (CD 解説). モンゴル情報誌しゃがあ.
北京市文物研究所 編著.

2007 軍都山墓地: 玉皇廟. 文物出版社.

Sachs, Curt.

1917 Die Maultrommel: eine typologische Vorstudie. Zeitschrift für Ethnologie, no. 49.
p. 184-202.

Süzükei, Valentina, & Tadagawa, Leo.

2013 The Melody My Mother Played: Old and Modern Khomus (Jew's Harp) Music of
the Tuva, at the Center of Asia / 母の奏でた旋律 (うた): アジア中央部 トゥヴァ
の口琴音楽 (CD 解説). Japan Jew's Harp Association / 日本口琴協会.

Tadagawa, Leo.

2007 Asian Excavated Jew's Harps: A Checklist. Journal of the International Jew's Harp
Society. no. 4. p. 5-11.

直川, 礼緒.

1990 口琴の魅力. 口琴ジャーナル. no. 1. p. 7-11.

1991 ムックリシャモジ誕生秘話. 口琴ジャーナル. no. 3. p. 22-23.

1994 口琴のひびく世界. 日本口琴協会.

2012 サハの口琴ホムスの現在. 北海道立北方民族博物館 第27回特別展図録. 東シベ
リア・サハ 永久凍土の大地に生きる. p. 46-53.

Цэвээндорж, Дамдинсүрэн.

1990 Морин толгойн булшнаас олдсон «Хунну хэл хуур». Шинжлэх Ухааны
Академиин Мэдээ. no. 3. p. 72-81.

The Jew's harp is an ancient musical instrument distributed all over the world, especially on the Eurasian continent. Though not as many as in Europe, a certain number of historical Jew's harps have been excavated in Asia. In the article, eleven examples of the A3b and A2 types of "stringed" lamellate Jew's harps made of bone and bamboo from 1) Xiajiadian, Inner Mongolia, China (8-4th centuries BC); 2) Jundushan, Beijing, China (8-5th centuries BC); 3) Morin Tolgoi, Mongolia (3-1st centuries BC); 4) Aimyrlyg XXXI, Tuva, Russia (2nd century BC); 5) Sakhsar, Khakassia, Russia (4-5th centuries); 6) Ust-Voikar hillfort, Yamalo-Nenets Autonomous Okrug, Russia (18-19th centuries) will be discussed, as the first part of a paper.

(本学付属民族音楽研究所社会人講座講師、日本口琴協会代表)